

『かかとを失くして』における信頼できない語り手

葛鳳娟(甲南女子大学大学院交換留学生・天津外国語大学高級翻訳学院)

1. 序論

多和田葉子は、村上春樹、小川洋子と並んでノーベル文学賞候補の一人として名前が挙げられる作家であり、リービ英雄、楊逸と並んで「越境作家」としても知られている。

多和田葉子は、1987年に詩集『あなたのいるところだけ何も無い』を出版してドイツでデビューし、それ以来、およそ40年間にわたって小説、戯曲、随筆を100冊以上書き、その作品が日本語、ドイツ語、英語、フランス語、イタリア語、中国語、ロシア語で出版されている。また、日本では芥川賞、谷崎潤一郎賞、紫式部文学賞といった多くの文学賞を受賞したのみならず、ドイツの「クライスト賞」やアメリカの「全米図書賞」(翻訳文学部門)を受賞し、国際的な評価が高まっている。

本稿は、小説『かかとを失くして』を取り上げる。本作では、主人公であり語り手でもある「私」は、書類結婚によって異国を訪れ、夫の家に住みつき、奇妙な「かかと」のない生活を送る。一人称視点で書かれた小説だからこそ、読者は「私」の心の中にしっかりと入り込み、「私」の言う言葉を全部事実として受け入れたり、「私」の出来事とほかの登場人物に対する評価と解釈に賛成したりしてしまいがちである。しかしながら、「私」の語りはいつも信頼できるものではない。それは、一人称視点の語り手である「私」は、異国に着く時から、常に自分が他者であると意識し、不安感が強く、道徳的判断力に束縛されて物事を主観的に捉えて語るからである。その結果、語り手はウェイン・ブース(Wayne C. Booth)の言う「内在する作者(implied author¹)」の規範から逸れることになってしまう。

そこで、本稿では、多和田葉子のこの作品を、物語論の理論の一つである「信頼できない語り手(unreliable narrator)」を使って解釈してみたい。「私」が異国で報告者、評価者、解釈者として行った信頼できない語りを述べたうえで、「信頼できない語り手」がもたらすテーマの強調、読者の作品解釈の意欲の向上、作品の倫理的批評の強化という三つの効果を説明し、語り手「私」の生理・心理・文化的側面、作者多和田葉子の批判意識の体現、多和田文学の特性という三つの視点から「信頼できない語り手」が生じた原因を明らかにしようとする。

本稿は、5章から構成される。第1章では、作者の紹介、本研究の動機、本稿の構成を述べる。第2章では、作品の概要と先行研究を紹介したうえで、本研究の立場を明らかにする。第3章では「信頼できない語り手」という文学理論の提起と発展を概観し、ジェームズ・フェラン(James Phelan²)の理論を中心に説

¹ 「implied author」と「unreliable narrator」の日本語訳は『フィクションの修辞学』pp.196-218を参照している。なお、「implied author」は「暗黙の作者」とも訳されている。

² 物語学学者の名前「James Phelan」及び後文に出る「Tamar Yacobi」、「Ansgar Nünning」の日本語訳は筆者翻訳である。

明する。第4章では本作において語り手の「私」が信頼できない語り手としてどのように表れるかを、フェランの「不信頼性の座標軸」(axes of unreliability)と「不信頼性の六つのタイプ」(a taxonomy of six types of unreliability)を手がかりにして分析するだけでなく、その効果を述べ、原因を明らかにしようとする。第5章では本論のまとめと今後の課題について述べておきたい。

2. 作品と先行研究

多和田葉子は、ヨーロッパ、アメリカ、アジアでこれまで700回以上の朗読会を開いており、豊かな異文化体験を持っている。そして、その異文化経験を『犬婿入り』、『旅をする裸の眼』、『雲をつかむ話』、『地球にちりばめられて』といった性別、国境、言語、文化の越境をテーマとして扱う小説にしている。そのため、多和田は「境界」を超えて日本を凝視する世界文学の旗手³と谷口幸代から高く評価されている。中でも『かかとを失くして』は多和田葉子の日本でのデビュー作であり、1991年第34回群像新入文学賞の受賞作でもある。

本稿が取り上げる『かかとを失くして』のあらすじを簡単に述べる。主人公「私」は、書類結婚によって異国へ渡るが、夜行列車から降りようとした瞬間、足元が不安定でよろめいてしまう。ようやく夫の家に辿り着いて住みついた「私」は、一度も夫と対面することがない。母国から持ってきたゆで卵、帳面、万年筆も夫に取られて鍵のかかる部屋に置かれる。そして、入居してから毎晩、「私」は異なる夢を見続け、目覚めるたびに枕元には前日より一枚多い紙幣が置かれている。二日目から、「私」は「初心者総合専門学校」に通い、この町のお風呂の入り方や買い物の仕方といった常識を学び始める。四日目、夫が予約してくれたカードを持って病院へ診察に行った「私」は、かかとが欠けていると医師に判断され、プラスチックで補う手術を勧められるが、その手術を拒否した。その後、看護婦長から「異文化とかかとに関する社会医学的考察」というパンフレットをもらう。最後に、「私」は、錠前屋に頼んで帳面を置く部屋の鍵穴を壊してもらう。ドアが開き、自分と結婚していた夫が実は死んだイカであったことを知る。

本作『かかとを失くして』だけを扱った論文は3点ある。山崎真紀子(1995)は、3つの観点から、この作品を解釈しようとする。すなわち、①持ち物、②恐怖感、③夫がイカであること、の3つである。①の持ち物について説明すると、「私」は、着替え、帳面と万年筆、卵を持って新しい生活を始めようとする。このことは、古い結婚観を踏襲する夫との夫婦関係がうまく行く可能性がないことを示している。②については、「私」が感じている恐怖感を、「捉えどころのない結婚生活、実感を抱くことができない結婚生活」(山崎 1995:96)と「異国にいるという不安感」(山崎 1995:96)に起因すると述べている。また、夫との結婚は、昔話の「異類婚姻譚」が持つ結婚の〈普遍性〉の転覆になることを説明する。これが③である。山崎は以上のことを通して、本作が「現実の強固な仕組みに揺さぶりをかけた」作品であるという結論に至る。

師華(2006)は「私」の精神に焦点を当て、心理的な側面から夢、かかと、鍵と

³ 谷口幸代、2020、「多和田葉子：『境界』を超えて日本を凝視する世界文学の旗手」、『nippon.com』、<https://www.nippon.com/ja/japan-topics/g00963/>、(参照 2025. 11. 21)

いう3つのキーワードの隠喩的意味を明らかにする。そして、現代社会において人は異文化の中に生きる不条理および人間関係のねじれを実感する。そうした中で、主人公の「私」は自己意識が芽生えて自分の存在価値を見つけている。

邢亜南(2023)は、視線、かかと、夫の変身譚という3つの視点からこの作品を解釈する。まず、「私」が見る視線と「私」を見る視線の分析により、人間は、他者の正体を見破ってイメージを固定化させようとするが、かえって真相を見逃してしまう。そして、「かかと」には、自己認識と他者認識がせめぎ合う場、女性の性的身体の換喩、新しい共同体に共通する言語、思考や行動様式、価値観といった多くの意味が含まれる。こうした言葉の多義性を通じて新たな表現の可能性を見出し、最終的に、夫は夢を媒介として変身して現実と非現実を跨ぐ一方、「私」は夫との不平等なジェンダー関係を断って異類婚を解消することで変身を体験するのだとした。

こうした先行研究においては、本作について共通する認識が見られる。まず、作品の核心を「私」が抑圧的な環境から脱却し、人生を再スタートするプロセスであると解釈し、「主体性の確立」を作品の主要なテーマとして共有していること。次に、持ち物、かかと、夢、鍵、視線といった作品に散りばめられた具体的なモチーフを手がかりに、それらの隠喩的・象徴的意味を読み解くという方法を採用していること。最後に、作品は、単なる個人の物語ではなく、婚姻制度、ジェンダー役割、異文化コミュニケーションといった社会的な構造に対する批評を行っていることである。しかしながら、3点の論文いずれも、語り手「私」の語る内容とそれが表すテーマを分析の対象として研究しているが、「私」がどのように語るのか、そしてその語り方がどのような効果をもたらすのか、さらになぜそのような語り方をするのかについてはまったく議論されていない。また、本作にはいくつかの矛盾があるが、それは単なる作者のミスなのか、それとも作者がわざわざ使う技法なのかという疑問が生じる。

したがって、本稿は以上の先行研究を踏まえて、「私」の語り方に焦点を当て、本作の矛盾を「信頼できない語り手」という視点から捉え、語り手の信頼性という問題に正面から取り組んでいきたい。また、「私」の語り手が信頼できないものであると確認したうえで、その語り手自体が本作に生み出す文学的効果と、「信頼できない語り手」が生じる原因にも言及する。

3. 「信頼できない語り手」理論の説明

「信頼できない語り手」は、ジャンルやメディアを越えて広く存在する語りの現象であり、よく用いられる語りの技法でもある。それは、虚構作品に限らず、伝記や回想録といったノンフィクションにも見られるほか、映画や絵画といったメディア作品にも存在する。ウェイン・ブースは『フィクションの修辞学』の中で、修辞法の観点から「信頼できない語り手」の概念を次のように定義している。

この種の、語り手における距離に対するわれわれの用語は、絶望的なまでに不完全なものだ。もっと良い言葉がないので、私は語り手がその作品の規範

(つまり、内在する作者⁴の規範)を代弁し、それに従って行動する場合、彼を〈信頼できる〉語り手と呼び、そうでない場合〈信頼できない〉語り手と呼んだのである。

(米本 1991:206)

ブースによるこの定義は、語り手が信頼できるかどうかを判断する根拠を、「語り手」と「内在する作者」との距離に据え、この理論の基盤を築いている。

しかしながら、「内在する作者」に対するあやふやな説明および学者たちのそれぞれの立場の違いにより、ナラトロジスト (Narratologist) は、「内在する作者」の必要性や「信頼できない語り手」の判断基準といった問題をめぐって激しい論争を展開した。その中で、主に二つの流派が形成された。一つは、ブースおよびその弟子であるジェームズ・フェランを代表とする修辭的物語論 (rhetorical narratology) である。彼らは「内在する作者」に基づくテキスト内部の規範を重視し、「信頼できない語り手」が読者に向けた仕掛けであると考えている。もう一つは、タマー・ヤコビー (Tamar Yacobi) とアンスガー・ニュニング (Ansgar Nünning) を代表とする認知的物語論 (Cognitive Narratology) である。彼らは読者の役割を重視し、「信頼できない語り手」がテキスト本来の属性ではなく、読者が作品を読む時に、自分自身の世界観、知識の枠組み、文化的背景を用いて、テキスト内の矛盾や空白を解釈する結果であると考えている。

本稿では、テキスト分析を行うにはジェームズ・フェランの「信頼できない語り手」理論を用いる。フェランはブースの「信頼できない語り手」に関する説明を踏まえ、事実、人物、出来事の座標軸 (the axis of facts, characters, and events) に沿って報告し、知識または知覚の座標軸 (the axis of knowledge or perception) に沿って解釈し、倫理観の座標軸 (the axis of ethics) に沿って評価するという3つの主な任務を語り手が持つと考えている。これらがいわゆる三つの「不信頼性の座標軸」である。これをもとに、彼はさらに、「不信頼性の六つのタイプ」を唱える。

When a narrator performs any of the three tasks inadequately (as measured against how the implied author would perform it), then we have unreliable narration. But narrators can be inadequate in two main ways: by distorting things or by failing to go far enough. Consequently, narrators can be unreliable by misreporting, misinterpreting, and miscalculating (in these cases readers need to reject the narrator's version and, if possible, replace it with another one) and by underreporting, underreading, and underevaluating (in these cases readers need to supplement the narrator's version).

(James Phelan 2012:34)

⁴ 「内在する作者」という概念の定義と必要性は、*The Rhetoric of Fiction (2nd Edition)* 1983, pp. 149-168 と *A Companion to Narrative Theory* 2005, pp. 75-88 を参照している。

語り手が三つの任務のいずれかを十分に遂行しない場合（それは、内在する作者がそれをどのように行うかという基準に照らして測られる）、信頼できない語りが生まれる。しかも、信頼できない語りには主に二つのパターンがある。物事を歪曲して伝える場合と、十分に深く掘り下げられない場合である。その結果、語り手は、誤った報告、誤った解釈、誤った評価によって（これらの場合、読者は語り手の見解を拒否し、可能であれば別の見解で置き換える必要がある）、あるいは、報告不足、解釈不足、評価不足によって信頼できなくなる（これらの場合、読者は語り手の見解を補足する必要がある）。

（筆者訳）

しかしながら、語り手は、常にすべての座標軸上で信頼できない語りをするわけではない。ある座標軸上でいつも信頼できる語りをする一方、ほかの座標軸上で信頼できない語りをしてしまう語り手がいる。さらに、フェランは読者と語り手の関係について、「疎外型の不信頼性 (Estranging Unreliability)」と「契約型の不信頼性 (Bonding Unreliability)」を提唱している。前者は語り手と読者の距離を強調して広げることがを指す。後者は語り手と読者の距離を縮めることを指す。

4. テクスト分析

本作の「私」は、報告者、評価者、解釈者として信頼できない語りを行った。本章では、「事実、人物、出来事の座標軸上の誤った報告」、「倫理観の座標軸上の誤った評価」を中心に分析していきたい。ただし、本作の「知識または知覚の座標軸上の誤った解釈」は、「倫理観の座標軸上の誤った評価」に伴って現れるので、一節で述べる。その上で、本作における「信頼できない語り手」がもたらす三つの効果を分析し、「信頼できない語り手」が生じた原因を三つの視点から説明する。

4.1 「信頼できない語り手」の表現

4.1.1 事実、人物、出来事の座標軸上の誤った報告

「私」は異国の駅に着いてから、すぐにこの駅の天井と地盤とが傾いているという違和感を抱いてきた。しかし、一般的に駅とは、きちんと建てられているものなので、天井と地盤が傾くことはない。語り手の「私」は、三回の描写にわたって通常では考えられない物理的状況を読者に提示し、次第に「事実」として受容されるよう巧妙に誘導する。まず、本作の冒頭には、「九時十七分着の夜行列車が中央駅に止まると、車体が傾いていたのか、それともプラットフォームが傾いていたのか、私は列車から降りようとした時、けつまずいて放り出され先にとんでいった旅行鞆の上につぶせに倒れてしまった」（多和田 2014:8）と書いてある。この描写は、車体かプラットフォームのいずれかに傾斜が存在する可能性を示唆している。次に、「天井も傾いているようだが、地上に目をもどすと、やっぱり地盤も傾いているらしいと思えたのは、どの人も前につまずくようにして歩いているからで、それでも誰も地面を見ようとはせず、前方の遠くをにらんで歩いていた」（同上:9-10）という描写は、ほかの人も「つまずくように歩いてい

る」という観察を追加し、問題が個人の感覚ではなく環境に存在すると示唆することで、傾斜の信憑性を高めている。さらに、「私は上を向いていると目まいがしてくるので、やっぱり上を見るのはやめて、地面をしっかりと見つめて行こうと思ったのだが、なにしろその地面が傾いているので、これも見つめていると目まいがしてきて」（同上:10）と書いているように、自分の目まいを地面の傾斜に起因すると「私」は決めつけている。こうして、現実と違い、この架空の世界では駅の天井と地盤が本当に傾斜していることを読者に信じ込ませようとしているのである。

こうした一連の物語言説は、フェランの「事実、人物、出来事の座標軸上の誤った報告」に該当する。つまり、読者に「事実」として信じ込ませようとする駅の天井と地盤が傾いていることは事実ではないのである。物語後半で、「これはプラスチックで足の一部を補強するしかありませんね…でもそういう訳にはいかんよ、欠けているんだから」（同上:51-52）と医師に指摘されている。「私」にはかかとがないので、駅の天井と地盤が傾いていると間違っただけで判断していたのである。しかも、自分にはかかとがないということを知っても、前の誤った報告を正そうとはしていない。無論、現実では、特殊な疾患に罹る患者以外に、かかとを持たない人は存在しない。しかし、「信頼できない語り手」は、現実に基づいて判断するものではなく、作品中の矛盾や空白に基づいてからはじめて生じるものである。そのため、虚構世界でかかとを持たない人間が存在することを前提に、前文の「誤った報告」は成立することになる。そして、こうした誤った報告は、駅が傾いているという表面的意味を表すのみならず、「かかと」の隠喩的意味を考慮に入れた場合、「内在する作者」の意図を際立たせることになる。婦長からもらったパンフレット〈異文化とかかとに関する社会医学的考察〉は、かかとの隠喩的意味を異文化に関連づけている。しかし、「私」がパンフレットを読まずにバスの中に置き忘れてしまうという設定は、かかとの欠如が含意する解釈を読者に委ねる効果をもたらす。「かかと」を「異文化適応の基盤」と読むならば、かかとの欠如は、異文化社会で確固たる立場を築けない語り手の状態を象徴する。かかとを失った「私」は、異文化の土地をしっかりと踏んでうまく生きていくことができないし、この町に住んでいる人々の価値観や文化への理解も異文化社会への溶け込みもできないということを表す。一方、「かかと」を「母国文化の基盤」と解釈すれば、かかとの欠如は、異国を訪れてすぐに故郷を失った「私」が、異文化社会でアイデンティティを再構築する困難を意味する。この点を前提としたら、「私」はいかにアイデンティティを再確認し見つけるかが注目される。

本作においてはもう一つの「事実、人物、出来事の座標軸上の誤った報告」がある。小説の中には全部で五つの夢が描かれており、そのうち前の四つの夢はいずれも夫に関連する出来事である。しかし、四つ目の夢で起こったことが果たして夢だったのかに対して疑問がある。四つ目の夢に関する描写は以下の通りである。

夫は癩癩を起こして、なぜ答えない、聞こえないのか、と怒鳴って、私の耳の穴に万年筆を突っ込んだので、黒インクが鼓膜に染みてさらに体に侵入していった。インクが体に入ってしまうえばおまえも俺の仲間だな、と言うので、どう

してですか、インク壺じゃあるまいし、それより私の帳面を返してください、
と言ったところで目が覚めた。やっぱり夢だったらしく、机の上にはお札は四
枚しかなく、耳の穴の中は乾いていて……(後略)

(同上:45)

「私」は、「耳の穴の中は乾いてい」ということから、夫に万年筆に突っ込まれ、黒インクが鼓膜に染みたということが夢だったと判断した。そして、この夢の翌日に、病院で診察してもらう時に、「ピンセットを手に取り、私の耳の穴の中を調べ始めた。看護婦を呼んで懐中電灯を持って来させ念入りに何か探していたが、私は次第に恥ずかしくなり、黒いのは耳垢ではありません、夫がインクをこぼしてしまったんです」(同上:50-51)というやり取りがある。もし夫に万年筆を突っ込まれたことが夢だとしたら、耳の穴の中に黒いインクは無いはずだった。さらに、「やっぱり夢だったらしく」の「らし」という言葉も、あの夜、発生したことが夢ではないと「私」は診察に行く前にすでに無意識的に気づいたことを示唆している。したがって、四つ目の夢に関する物語言説では、なにが発生したかに関する語りは信頼できる一方、発生したことが夢であると判断したことは「事実、人物、出来事の座標軸上の誤った報告」に該当する。「内在する作者」はこの誤った報告を通じて、不平等な夫婦関係のもとに妻が夫から身体的暴力を受けている現実を赤裸々に描き出したのみならず、夫を嫌い、夫と別れたいという自分の本当の気持ちを重視し、新しい出発を遂げようとする主人公の意欲も強調している。それゆえに、アイデンティティが芽生えて人生の転換点につながる夢は、現実になったのである。

4.1.2 倫理観の座標軸上の誤った評価

次に「倫理観の座標軸上の誤った評価」を体現するテキストを分析していきたい。報告者である「私」は、夫に対してもこの町のことに對しても誤った評価を行っている。

まずは夫への評価。ようやく夫の家にとどり着いた「私」は、冷蔵庫を開けてすでに腐ったチーズを食べ始めると、「夫なんて結婚の一部に過ぎず本当にこの家に住めて、毎日乳製品を食べ、書類に書いてあるように好きな学校に行けるのなら、夫なんてどんな人でもいい」(同上:18)と思った。ここでは、語り手は、夫を「どんな人でもいい」と誤って評価している。夫が外でせつせと働き、妻が家事をして子供を立派に育つという古い婚姻観に従えば、夫と接する時間が少なくて、お金を夫からもらえれば、確かに夫がどのような人でもいいようにも思われる。一方、それとは反対に、「内在する作者」は、お金ではなく、愛の上に築かれる平等な夫婦関係を提唱する新しい婚姻観を主張する。語り手も本作の後半では、この誤った評価を訂正している。「この町へ来てから痩せてしまったのは、食べ物がないからではなく、いっしょに食事する人がいないため、おなかも減らずこのまま行くと栄養失調になるかもしれない、と心配になってきた」(同上:44)。この「いっしょに食事する人」は無論、夫を指している。言い換えれば、もし夫が本当にどうでもいい人なら、いっしょに食事をしなくても、「私」は楽しく暮らせるはずだったが、今は痩せてしまった。つまり、夫は誰でも人どころか、夫としてやるべきことがあって、その役割を果たさないといけ

ないのである。

ところが、この文は前の誤った評価を補正していても、知識または知覚の座標軸上の誤った解釈になってしまう。「私」が痩せてしまった根本的な原因は、「私」がうつ病になったことにあるのである。一般的には、夫婦は一緒にご飯を食べる時に、お互いの喜びを分かち合ったり、悩みを相談したりすることにより、お互いの関係を確かめ合い、同じ体験をともにして一体感やつながりを感じる。しかし、そもそも馴染みのない異国で暮らしていて不安感や恐怖感が募る「私」にとっては、夫が「私」といっしょに食事してくれないので、自分の気持ちを伝えて悩みを相談するこの最後の機会を失い、気分が落ち込んでいってしまった。その結果、「私」はうつ病にかかってしまった。小説において、「内在する作者」は「私」がうつ病になるか、それとも抑うつ状態にあるということについては一切言及していない。しかし、「私」が普通に食事をしているにも関わらず、理由もなく痩せ、常に他人が自分に注目しているかどうか気にしているといった一連の表現から、読者はその結論を推測することができる。そして、「私」はうつ病に関する知識が欠けているため、あるいは自分が既にうつ病を患っていることに気づいていないため、自分が痩せてしまったことを、単に一緒に食事をしてくれない人がいないからとだけで解釈している。これはまさに、知識または知覚の座標軸上の誤った解釈である。

次は町への評価。「私」は、恐怖感を強く持って異国で暮らすので、町のことを不安の目で見て悪く思っている。町に対する誤った評価は四つある。一つ目は、駅前通りの脇道に入って、子供の歌を聞いてから気になったこと。

私には何も隠すことはなかったが、何か私にとって不利なことがあって、それが私自身に何なのか分からないので、みんなに笑われるのかも知れず、そもそも駅でなぜ旅券審査と税関がなかったのか、そこには何か意地の悪い意図が隠されているのではないかとそんなことまで気になってきた。

(同上:11-12)

二つ目は、初めて学校で先生と会う時に、先生が睡眠薬の匂いと気づいて推測したこと。

もしこの人が夜眠れないのだとしたら、それはお金の心配ではないだろうし、年のせいでもないはずなのにどうしてだろう、と私はそれが気になり、何か私の想像の及ばないような災害がこの町を待ち受けていて、私だけはまだそれを知らされていないのかもしれないと推測した。

(同上:23)

三つ目は、学校で二回目の授業を受ける前に、女教師がタバコを吸う姿を見て連想したこと。

学校のドアの前に女教師は立って煙草をを吸っていたがその吸い方は独特で、フィルターに吸い付く時はまるで、素早く吸い付かないとフィルターが逃げていってしまうとでもいうようにあわてて、煙を吸い込む時には、どうせ吸い込

んだものなら体の隅々まで行き渡らせたいと食欲で、そのくせ吐き出す時には、いかにも身体中の毒をいっしょに吐き出してしまいたい、とでもいうように、憎しみを持って吐き出すのだった。それを見るにつけても、この町には危機が迫っていて、みんな残りわずかな人生を生きているのだとしか解釈のしようがなかった。

(同上:27-28)

四つ目は、学校で三回目の授業を受ける時に、仕方なくやったことばかりあると言われた時に言い返したこと。

そんなことより早くこの町の事を教えてくださいと謙虚さを装って言うと、この町の事などという特別な事は何もなく、みんな普通に生活しているだけです、と女は言い切った。普通ということはないでしょう、私はこの町へ来てからまだ普通と思われる現象を見たことがないんですよ、と言っても女はぼかんとして私の顔を見つめているだけだった。

(同上:42-43)

総じて、この町には「何か意地の悪い意図が隠されている」、「何か私の想像の及ばないような災害がこの町を待ち受けている」、「この町には危機が迫っていて、みんな残りわずかな人生を生きている」、「普通ということはない」、と「私」は評価しているが、実際には、この町に着いて「私」が危険なことに遭遇したことは一回もない。こうした一連の根拠もない評価は、子供の歌、先生個人のことや癖を町全体に誤って結びつけている。読者は、語り手の精神状態が不安定であり、その語りが主観的すぎるであることを既に知っている。この前提において、読者は、この町が危ないという語り手の見解に賛成しない。「内在する作者」は、この点で読者と一致しているが、「信頼できない語り手」を繰り返し用いることで、小説の結末でこの町に何か悪いことが実際に起こるかもしれないという予想を読者に抱かせる。これは、最後に夫が「死んだイカ」(同上:60)であったことを「私」が知るという結末と対照をなし、ひいては「疎外型の不信頼性」が頂点に達することでもある。

4.2 「信頼できない語り手」の効果

本作において、「信頼できない語り手」は、読者に仕向けた物語を語る修辞法として三つの効果をもたらしている。

第一に、テーマを際立たせること。語り手が事実の座標軸上で誤って行った報告(駅の「傾斜」)と、その隠喩的根源である「かかとの欠如」は、強力かつ核心的なメタファーになっている。これは単なる生理的描写ではなく、主人公が異文化の中で足場を失い、しっかりと立つことができないというアイデンティティの危機と疎外感を象徴している。また、夫に対して「どんな人でもいい」という倫理観の座標軸上の誤った評価も、「私」が結婚してから感情的な空虚感を持っていることを提示している。「信頼できない語り手」は、「異文化不適應」と「アイデンティティの危機」という抽象的なものを、「かかとがない」という知

覚可能な物理的奇形に具象化し、主題をより一層強調している。

第二に、読者の作品解釈の意欲を高めること。「内在する作者」は、一連の「信頼できない語り手」を通じて、語り手を信頼する聞き手と真実を洞察する読者の間に、物語の緊張感(tension)を生み出す。読者は最初、駅が傾いているという描写を受け入れたかもしれないが、後に気づいた「かかとの欠如」という真実により、これまでの全ての語りを見直し、何が客観的事実で何が主観的感觉かを積極的に見分けざるを得なくなっている。さらに、「私」が痩せた原因を誰も食事に付き合ってくれないこととする一方、読者がその抑うつ状態を推測できる。この展開を通じて、読者は語り手の限られた視点を突破し、テキストの細部を組み合わせて解読する必要があると示している。この過程により、小説の読解は、テキストを受動的に受け入れるものではなく、その内容、形式や表現、信頼性といったものを、自分の知識や経験を踏まえて深く考えて理解したり批判したりするものであることが明らかになった。

第三に、作品の倫理的批評を強めること。個人的な不安を「災害が迫っている」という町への投影、という語り手が倫理観の座標軸上で行った誤った評価は、読者にその偏見を批判させ、さらに自分自身も不安を抱えて他者文化を誤読していないか反省させることになる。また、「夫が死んだイカである」という不条理な結末は、前述の「夫なんてどんな人でもいい」という宣言と対照をなし、語り手の不信託性を頂点に押し上げる。そして、「疎外型の不信託性」は、読者に語り手の視点との決別を強要し、それによって婚姻、アイデンティティにおける倫理観や価値観をより深く考えさせることになっている。

4.3 「信頼できない語り手」が生じた原因

この一節では、小説の語り手「私」、作者多和田葉子、多和田文学の特性という三つの視点から、『かかとを失くして』に「信頼できない語り手」が生じた原因を分析する。

まず、語り手「私」の視点から見ると、「私」の信頼できない語りは、意識的な欺瞞によって生まれたものではない(小説の中で「私」が嘘をついたが、それは物語論の「信頼できない語り手」に該当しない)。それはむしろ、生理的、心理的、文化的という三つの要因が重なり合って生み出されたものである。第一に、生理的には、かかとの欠如という身体的欠陥は、「私」の世界を見る視線を直接的に変えている。「駅が傾いている」という「誤った報告」は実は「私」の体験なのである。第二に、心理的には、「私」は婚姻において地位が低く、不平等を感じており、潜在意識では自分が受けた暴力と疎外を直視したくない。そのため、夫が万年筆を「私」の耳の穴に突っ込むという恐怖の事実を「夢」として誤って報告してしまう。この否認は、心理学における原始的防衛機制に該当する。つまり、「私」は自分を守るために、苦痛を引き起こす出来事を認めることを無意識的に拒み、それを夢として見て、まるで何事もなかったかのように振る舞っているのである。第三に、文化的には、「私」は異質な環境に身を置く異邦人であり、孤立無援の個人として文化的他者に直面する時、恐怖感が強くてよく自己を見失う。そのため、「私」は先生の不眠や特別なタバコの吸い方といった現象を、この町に潜む巨大な災厄の予兆として誤って評価してしまうのである。このような評価は、内面的な感情を外部の環境に投影して生じるものである。

次に、作者多和田葉子の視点から見ると、彼女はわざわざ「信頼できない語り手」という語り手の技法を使って、その批判意識を体現しようとしている。これを以下の三つの要点から説明していきたい。一つ目は、言語と現実の間の固定的な対応関係に疑問を投げかけることである。多和田は、駅が傾いているという一見荒唐無稽な話を通して、もし身体的な欠陥（かかとの欠如）がある人、あるいは全く異なる文化的背景を持つ人が感じ取る世界は、本当に間違っているものなのか、と我々に考えさせる。一般人の間で合意形成（「駅は傾いていない」という見方を持つ）ができるのは、我々大多数が健康な体と似た文化的背景を持つからである。しかし、それは我々の見方が唯一の真理であることを意味しない。二つ目は、男性中心主義と管理社会を批判することである。かかとの欠如は、伝統的な婚姻制度において女性が自立できないことと、現代社会において個人に安定した足場がないことを象徴している。多和田は「私」の不条理な知覚を通して、見えない社会的構造がもたらすものを、可視化し、感覚可能な身体症状と空間の歪みへ変えることで、批判をより鋭く具体的なものにしていく。三つ目は、移住体験を生き生きと描き出そうとすることである。多和田は孤独を直接に語るのではなく、「私」の信頼できない語り手により、海外に移住する人が経験する疎外感、言語の壁、文化の違いによる誤解を最大限に表現し、異文化の中で理解を得られず、文化的喪失感が強いという苦痛を読者に実感させている。

最後に、多和田文学の特性という視点から見てみたい。そもそも人間の思うことと言葉の間には、常に隙間がある。文学作品に当てはめると、作家が創作する時に、考える内容と書き出す文字の間に隙間があることになる。そうすると、文学作品では、「内在する作者の規範」と語り手の語る内容が一致しない、つまり「信頼できない語り手」になってしまう。また、母国語で書かれる小説には既に「信頼できない語り手」が存在するという前提を認めた上で、越境作家の作品には、「信頼できない語り手」がより多く存在するのではないかと筆者は思っている。多和田自身は随筆『エクソフォニー——母語の外へ出る旅』で以下のように述べている。

言葉そのものよりも二ヶ国語の間の峽間そのものが大切であるような気がする。わたしはA語でもB語でも書く作家になりたいのではなく、むしろA語とB語の間に、詩的な峽谷を見つけて落ちて行きたいのかもしれない。

(多和田 2012 : 36)

これは、多和田がいずれの言語にも完全に回収されない、不安定で動的なアイデンティティを持ちながら創作することを意味する。したがって、この「峽間」に立つ語り手「私」にとって、世界を固定的で確かなものとして語ることは最初から不可能である。この理念が、「信頼できない語り手」が作品中に多く存在することに直接的に結びついている。

つまり『かかとを失くして』における「信頼できない語り手」は、語り手「私」の受動的な信頼できない語り手と作者多和田葉子の自発的な信頼できない語り手が見事に結合した産物であり、ほぼすべての多和田作品の底に潜んでいる共通する特徴でもある。

5. 結論

本稿では、先行研究で顧みられなかった小説内の矛盾と語り手「私」の語り注目することで、『かかとを失くして』を再解釈した。語り手「私」は、かかとの欠如という身体的特性や異文化における心理的不安、さらに文化的疎外感を持っているので、誤った報告、誤った評価、誤った解釈を行う信頼できない語り手になっている。この「信頼できない語り手」は、読者にテキストの表面的意味だけではなく、その深層を読み解くことを促し、結果として「異文化適応」「アイデンティティ」「ジェンダー」といった作品の主題を一層強調したり、読者の作品解釈の意欲を向上させたり、作品の倫理的批評を強化したりした。さらに、語り手の個人的な症状として現れる「信頼できない語り手」は、作者多和田葉子に意図的に使われる批判のための道具であり、多和田文学の特性とも関係している。

今後の課題としては、まず、本稿で使ったジェームズ・フェランの修辭的物語論に加えて、アンズガー・ニュニグらが代表する認知的物語論の観点を導入することが考えられる。読者がどのような手がかりに基づいて語り手の信頼できない語りを見つけたり、どのように解釈をするのかを分析したりすることで、読者反応をより包括的に捉えることができる。

また『かかとを失くして』以外の多和田葉子の作品、例えば『雪の練習生』や『献灯使』、『太陽諸島』といった作品にも「信頼できない語り手」が存在するかどうかを検証し、多和田文学におけるこの技法の普遍性とそのバリエーションを明らかにする必要がある。これにより、多和田文学をより深く理解することができると思う。

参考文献

- ウェイン・C. ブース著(1983)、米本弘一・服部典之・渡辺克昭訳(1991)『フィクションの修辭学』 pp. 196-218, 白馬書房.
- 邢亜南(2023)「眼差しと変身」『跨境 日本語文学研究』17号. pp. 195-213, 笠間書院.
- 多和田葉子(2014)『かかとを失くして 三人関係 文字移植』 pp. 7-60, 講談社.
- 多和田葉子(2012)『エクソフォニー——母語の外へ出る旅』. 岩波現代文庫.
- 山崎真紀子(1995. 2)「多和田葉子『かかとを失くして』論 異国という装置」『昭和文学研究』30巻, pp. 90-100.
- 師華(2006)「失去脚后跟：荒誕的生存感」『西北大学学报』5号, pp. 150-152.
- David Herman, James Phelan, Peter J. Rabinowitz, Brian Richardson and RoByn Warhol (2012). *Narrative Theory Core Concepts and Critical Debates*. pp. 29-38, Ohio State University Press.
- James Phelan and Peter J. Rabinowitz(2005). *A Companion to Narrative Theory*. pp. 75-88, Blackwell Publishing Ltd.
- Wayne Booth(1983). *The Rhetoric of Fiction (2nd Edition)*. pp. 149-168, University of Chicago Press.